

アユ資源・漁獲の状況等について

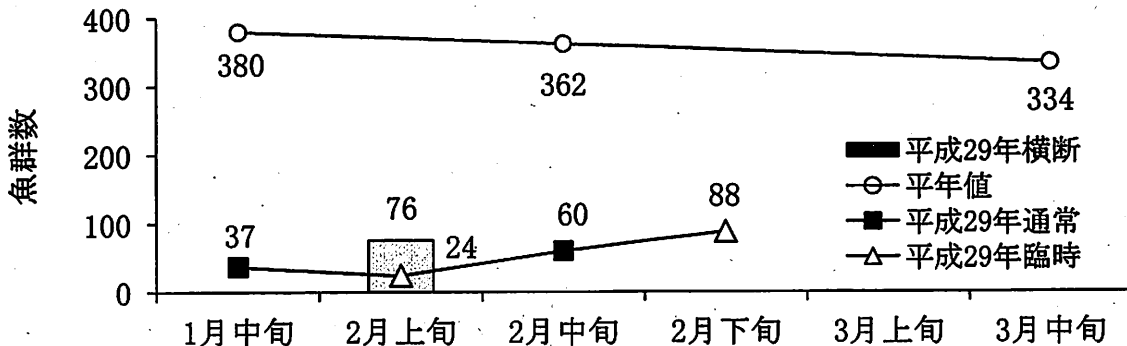
1. 資源状況

①最新の臨時魚群調査結果(2月28日、3月2日)

- ・臨時の魚群調査を実施した結果、88群の魚群数を観測。
- ・2月の平年値362群に比べて低い水準。

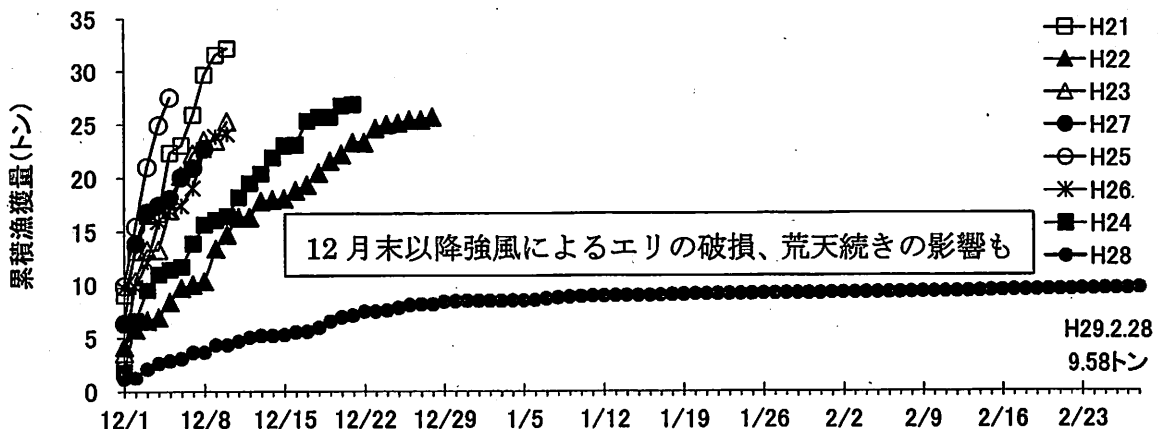
②今年の魚群数の推移

- ・臨時の調査を含めた魚群数の推移は、1月中旬37群(平年比10%)、2月上旬24群、2月中旬60群(平年比17%)、2月下旬88群と2月上旬以降は増加傾向にある。
- ・産卵ピークの遅れによってアユの成育が遅れていることで群れの形成が遅れているが、魚群が増加傾向にあり、魚群の計数基準に満たない小さな群れも観測されていることから、現在、成長にともなう魚群の形成過程にあると考えている。
- ・また、2月上旬に臨時に実施した琵琶湖の横断魚群調査では76群を確認したが、沖合の水深が概ね40~70mと深い水域の中層で魚群を観測し、アユが通常分布する水深30m以浅より深い所に分布していることも考えられた。



2. 漁獲状況

- ・昨年12月に始まったアユ漁は、極めて低調な漁獲状況で推移し、漁獲量は、2月28日現在においても12月分の注文量20.2トンの5割弱に当たる9.58トンに留まっている。
- ・県漁連では、不足しているアユの活魚を補うため、2月から沖曳網漁でアユ活魚の採捕を開始され、漁獲量は2月28日までに338kg(2隻、11日間出漁)となっている。



3. アユ資源緊急対策会議の結果（3月2日開催）

- ・水産課、水産試験場、琵琶湖環境科学研究センター、県漁連、水産振興協会が集まり、緊急対策会議を開催した。
- ・アユの漁獲状況、資源状況、プランクトンの発生状況などの情報を共有した。
- ・県漁連からは、①2月以降も漁獲が回復せず休漁している漁業者が多い、②今年の不漁をもっと早く予測できなかったのか、③人工河川への親アユの追加放流など今後の対策を早期に検討すべき、④近年の琵琶湖は魚介類全般の生息環境が悪化しているのではないか、などの意見が出された。
- ・水産試験場からは、①アユの産卵期が遅くに集中したことによる成長の遅れが漁獲や魚群の形成に大きく影響していること、②過去の調査結果と漁獲統計から、本年のアユ漁は、4・5月頃まで不漁が続くと予測されることが報告された。
- ・水産振興協会からは、昨年秋の人工河川から流下させたふ化仔アユは 14.4 億尾（H27年23億、H26年18億）で、人工河川へ放流した親アユの成熟度がやや低く、産卵が遅くなったことが報告され。
- ・琵琶湖環境科学研究センターからは、①昨年秋以降、ミクラステリアスという新たな植物プランクトンが琵琶湖で大増殖したこと、②このプランクトンは大型であり、アユの餌となるミジンコには捕食されにくいが、現時点ではこの現象とアユの不漁との因果関係は不明であることが報告された。
- ・意見交換において、水産試験場の3月の資源調査終了後、再度、対策会議を開催することとなった。

4. 今後の対応

- ・水産試験場で、3月上旬に魚群探知機による琵琶湖横断調査、3月中旬に通常の魚群調査を実施する。
- ・また、漁獲標本によるアユの成長、栄養状態（肥満度）の調査を継続。
- ・これらの結果を踏まえ、3月下旬には今年のアユ資源について一定の評価を行い、再度、アユ資源緊急対策会議で情報共有と意見交換し、来年度の対応などについて検討する。